



Title	看護学生における援助要請の特徴と自己肯定感および自己成長主導性との関連
Author(s)	稲葉, 友希; 小西, かおる
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2026, 32(1), p. 75-81
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/103935">https://doi.org/10.18910/103935</a>
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 看護学生における援助要請の特徴と 自己肯定感および自己成長主導性との関連

## Characteristics of Help-Seeking in Nursing Students and Their Relationship with Self-Esteem and Self-Directed Growth

稲葉友希<sup>1)</sup>・小西かおる<sup>2)</sup>

Yuki Inaba<sup>1)</sup>, Kaoru Konishi<sup>2)</sup>

### 要 旨

本研究の目的は、看護学生における援助要請スタイルの特徴を自己肯定感と自己成長主導性と関連付けて明らかにすることである。近畿地方の3大学で看護学生を対象にWeb調査を実施し、242名の有効回答が得られた。対象者を永井の援助要請スタイル尺度の分類に従い自立群、過剰群、回避群の3群に分類し、3群間の差の検定をKruskal-Wallis検定により行い、Steel-Dwass検定により多重比較を行った。自立群は、援助要請自立型の平均値(SD)が22.08(2.73)で、援助要請過剰型が回避群より有意に高く、援助要請回避型が過剰群より有意に高かった。過剰群は、援助要請過剰型の平均値(SD)が24.63(2.95)で、援助要請回避型が他の2群より有意に低かった。自己成長主導性が自立群よりも有意に高く、自己成長主導性の下位概念である資源の活用は、他の2群よりも有意に高かった。自己肯定感は回避群より有意に高かった。回避群は、援助要請回避型の平均値(SD)が22.96(2.93)で、援助要請過剰型が他の2群より有意に低かった。以上より、看護学生においては、資源を活用するために援助要請を促す教育的関りを持つことで、自己成長につながり、自己肯定感が高くなる可能性が示唆された。

キーワード：看護学生、援助要請スタイル、自己肯定感、自己成長主導性

Keywords : nursing students, help-seeking styles, self-esteem, self-directed growth

### I. 緒言

看護師は、チーム医療の中で連携や協働が必要な専門職であり、適切な援助要請行動が必要とされる<sup>1)</sup>。一方で、一般大学生を対象とした研究では「遠慮」や「察し」等の日本人特有のコミュニケーションの特徴<sup>2)</sup>や、コロナ禍の影響による人間関係の希薄化<sup>3)</sup>等が指摘されている。また、看護学生においても近年のコミュニケーション不足や、自己充足的な学習を行う傾向が指摘されている<sup>4)</sup>。このような対人能力の低下に対し、看護基礎教育において、適切な援助要請行動につな

る支援が求められる。

援助要請は「情動的または行動的問題を解決する目的でメンタルヘルスサービスや他のフォーマルまたはインフォーマルなサポート資源に援助を求めること」と定義される<sup>5)</sup>。永井は、援助要請には、困難を抱えても自身での問題解決を試み、どうしても解決が困難な場合に援助要請を行うという「援助要請自立型」、困難を抱えた際に、十分な自助努力を行わずに安易に援助要請を行う「援助要請過剰型」、困難な問題を抱えても、一貫して援助要請を回避する「援助要請回避型」

<sup>1)</sup>元大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻、<sup>2)</sup>大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻

<sup>1)</sup> Former The University of Osaka Graduate School of Medicine, Division of Health Sciences, <sup>2)</sup> The University of Osaka Graduate School of Medicine, Division of Health Sciences

の3つのスタイルがあるとしている<sup>6)</sup>。先行研究では、援助要請行動と性別<sup>7)</sup>や援助要請に対する抵抗感<sup>8)</sup>等との関連、援助要請スタイルごとの関連要因の違い<sup>9)</sup>について明らかにされている。しかし、これらの研究は、援助要請行動の合計や各援助要請スタイルとの関連を見たものであり、主に自立型の援助要請行動をとる者が、過剰型や回避型の援助要請行動をどの程度とるのかに着目した研究は見当たらない。適切な援助行動につながる支援をするためには、援助要請スタイル間の関連も含めて、看護学生の援助要請の特徴を明らかにする必要がある。

近年、社会全体に多様性を尊重する動きが広がっており、援助要請スタイルに応じた教育を行う必要性が指摘されている<sup>10)</sup>。田島<sup>11)</sup>は、援助要請行動と自己肯定感の関連を明らかにしている。

自己肯定感とは、自己を全体として価値ある存在として評価できる肯定的な感情と定義されているが<sup>12)</sup>、日本の学生の自己肯定感の低さが指摘されており<sup>13)</sup>、自己肯定感の育成は教育の重要課題といえる。また、教育においては、学生の前向きな変化への意識や自己成長への動機づけである自己成長主導性の育成の重要性も指摘されており<sup>14)</sup>、自己肯定感と自己成長主導性の関連も示されている<sup>15)</sup>。看護学生の援助要請の特徴を自己肯定感および自己成長主導性と関連付けて明らかにすることにより、自己成長の動機づけとなる援助要請の在り方について有用な示唆を得ることができると考える。

以上より、本研究では、看護学生における援助要請の特徴を自己肯定感と自己成長主導性と関連付けて明らかにすることを目的とする。援助要請スタイル間の関連も含めて、看護学生の援助要請の特徴を明らかにすることにより、より詳細な援助要請の特徴を理解することができ、看護学生の援助要請のスタイルに応じた支援、自己成長の動機づけや自己肯定感の育成につながる支援に貢献できると考える。

## II. 研究方法

### 1. 調査方法

短期大学および専門学校は3年制であり各学年での修業内容が異なり、社会人経験等の経験値が異なる学生が含まれ、援助要請行動や自己肯定感は対人ネットワーク、臨地実習等の経験と関連している<sup>16)</sup><sup>17)</sup>ことから、本研究では看護系大学に所属する看護学生(1~4年生)を対象とし、無記名自記式Web調査を実施した。また、援助要請と性別の関連<sup>7)</sup>があることから男子学生を分析から除外した。

研究室に機縁する近畿地方の看護系大学の教員または学部長、学科長等に文書または口頭で研究協力について説明し、文書または口頭で承諾を得ることができた3校で調査を実施した。

### 2. 調査内容

基本属性は、学年、性別、同居者の有無、アルバイト先の数、部活・サークルの所属数とした

援助要請スタイルは、永井の援助要請スタイル尺度(12項目)<sup>6)</sup>を用いた。援助要請自立型4項目、援助要請過剰型4項目、援助要請回避型4項目の全12項目で構成され、7件法で回答を求める。援助要請自立型得点が得点範囲4点~28点の中央である16点以上であり、かつ援助要請過剰型得点および援助要請回避型得点よりも高い場合、援助要請自立群(以下、自立群とする)とされる。援助要請過剰型得点および援助要請回避型得点に対しても同様に、援助要請過剰型得点および援助要請回避型得点が16点以上、かつ他の2つの援助要請スタイルの得点よりも高い場合、それぞれ援助要請過剰群(以下、過剰群とする)、援助要請回避群(以下、回避群とする)とされる。

自己肯定感は、Rosenberg Self-Esteem Scale: RSESの日本語訳であり、内田・上埜によって信頼性・妥当性が検証された日本語版RSES(10項目)<sup>12)</sup><sup>18)</sup>を用いた。4件法で回答を求め、得点が高いほど自己肯定感が高いとされる。

自己成長主導性は、徳吉・岩崎のPGIS-II<sup>19)</sup>

日本語版 (16 項目)<sup>15)</sup> を用いた。「私は自分を向上させようと積極的に取り組む」等の積極的な行動 4 項目、「自分の成長にあった実現可能な計画を立てる」等の計画性 5 項目、「自分自身が変わるために何が必要かを理解している」等の変化への準備 4 項目、「成長しようと思うとき、資源を活用する」等の資源の活用 3 項目の 4 つの下位尺度、全 16 項目で構成される。6 件法で回答を求め、各下位尺度および全体の合計得点を質問項目数で割ったものが下位尺度値および全体値とされる。得点が高いほど自己成長主導性が高いとされる。

### 3. 分析方法

援助要請スタイル尺度の分類基準に従い、対象者を自立群、過剰群、回避群に分類し、3 群間の差の検定を行った。分類基準に該当しなかった者は、分析対象から除外した。

基本属性については、カイ二乗検定または Fisher の正確検定により行った。援助要請スタイル、自己肯定感、自己成長主導性の得点については、Kruskal-Wallis 検定により行った。Kruskal-Wallis 検定で有意差が見られた項目に関しては、多重比較を Steel-Dwass 検定により行った。

本研究における有意水準は 5% とした。解析には統計ソフト JMP Pro 17.2 を使用した。

### 4. 倫理的配慮

協力を得ることができた 3 校において、看護学生に対して授業や成績等への影響がなく、回答への強制力が働かない方法を教員と検討した。

看護学生に対しては、研究の概要、Web 調査への回答は任意であること等を口頭または文書で説明した。回答は依頼文書に記載された QR コードまたは URL からアクセスできる Web 調査フォーマットにて行い、同意確認欄で「はい」にチェックを入れた場合のみ回答画面に移行するようにした。

調査期間は 2024 年 4 月 30 日から 9 月 30 日である。

本研究は、大阪大学医学部附属病院観察研究倫理審査委員会および研究機関の長の承認を得て実施した (承認番号: 24011、承認年月日: 2024 年 4 月 30 日)。

## III. 結果

### 1. 対象者の特性 (表 1)

本研究では、国立大学 1 校 (A 大学)、私立大学 2 校 (B 大学、C 大学) の合計 813 人に調査依頼文書を配布し、256 人から回収された (回収率: 31.5%)。このうち、回答の同意を得られなかった 3 人 (1.2%)、男性 11 人 (4.3%)、分類基準に該当しない 19 人 (8.6%) を除外した 223 人を分析の対象とした (有効回答率: 87.1%)。大学間で基本属性の全項目において有意な差は見られなかったため、大学の影響を考慮せず以下の分析を行った。

### 2. 看護学生における援助要請スタイルごとの特徴の把握 (表 1、表 2)

#### 1) 自立群の特徴

自立群に属する人数は 110 人 (49.3%) と、3 群の中で最も多かった。

援助要請自立型の平均値 ( $SD$ ) は 22.08 (2.73) であり、他の 2 群より有意に高かった ( $P < .001$ )。援助要請過剰型の平均値 ( $SD$ ) は 13.83 (4.23) で回避群より有意に高かった ( $P < .001$ )。援助要請回避型の平均値 ( $SD$ ) は 12.54 (4.93) で過剰群より有意に高かった ( $P < .001$ )。

#### 2) 過剰群の特徴

過剰群に属する人数は 86 人 (38.6%) で 2 番目に多かった。

援助要請自立型の平均値 ( $SD$ ) は 17.94 (3.91) で回避群との有意差は認められなかった。援助要請過剰型の平均値 ( $SD$ ) は 24.63 (2.95) であり、他の 2 群より有意に高かった ( $P < .001$ )。援助要請回避型の平均値 ( $SD$ ) は 8.33 (4.03) であり、他の 2 群より有意に低かった ( $P < .001$ )。

自己肯定感の平均値 ( $SD$ ) は 25.41 (5.37) であり、回避群より有意に高かった ( $P = 0.033$ )。

自己成長主導性の平均値 ( $SD$ ) は 4.03 (0.72) であり、自立群より有意に高かった ( $P = 0.037$ )。また、自己成長主導性の下位尺度である資源の活用の平均値 ( $SD$ ) は 4.31 (0.81) であり、他の

2 群より有意に高かった ( $P < .001$ )。

3) 回避群の特徴

回避群に属する人数は 27 人 (11.2%) で最も少なかった。

援助要請自立型の平均値 ( $SD$ ) は 16.85 (3.92)

で過剰群との有意差は認められなかった。援助要請過剰型の平均値 ( $SD$ ) は 9.63 (5.30) であり、他の 2 群より有意に低かった ( $P < .001$ )。援助要請回避型の平均値 ( $SD$ ) は 22.96 (2.93) であり、他の 2 群より有意に高かった ( $P < .001$ )。

表 1 基本属性の援助要請自立群、過剰群、回避群における差の検定

		全体		自立群		過剰群		回避群		P値
		242		110		86		27		
クラス構成人数 (人)		100		45.5		35.5		11.2		
クラス構成割合 (%)		人	%	人	%	人	%	人	%	
大学	A大学 (国立)	168	69.4	81	73.6	60	69.8	18	66.7	0.876 <sup>a)</sup>
	B大学 (私立)	28	11.6	14	12.7	8	9.3	5	18.5	0.499 <sup>b)</sup>
	C大学 (私立)	46	19.0	15	13.6	18	20.9	4	14.8	0.350 <sup>b)</sup>
学年	1年生	52	21.5	20	18.2	24	27.9	5	18.5	0.368 <sup>b)</sup>
	2年生	48	19.8	27	24.5	11	12.8	8	29.6	0.089 <sup>b)</sup>
	3年生	83	34.3	43	39.1	27	31.4	8	29.6	0.722 <sup>b)</sup>
	4年生	59	24.4	20	18.2	24	27.9	6	22.2	0.279 <sup>b)</sup>
同居者の有無	あり	129	53.3	58	52.7	47	54.7	15	55.6	0.962 <sup>a)</sup>
	なし	113	46.7	52	47.3	39	45.3	12	44.4	0.958 <sup>a)</sup>
アルバイト先の数	アルバイトはしていない	31	12.8	14	12.7	13	15.1	3	11.1	0.845 <sup>b)</sup>
	1つ	116	47.9	55	50	36	41.9	14	51.9	0.537 <sup>a)</sup>
	2つ以上	95	39.3	41	37.3	37	43	10	37	0.651 <sup>a)</sup>
部活・サークルの所属数	所属していない	123	50.8	53	48.2	42	48.8	15	55.6	0.753 <sup>a)</sup>
	1つ	89	36.8	39	35.5	36	41.9	9	33.3	0.609 <sup>b)</sup>
	2つ以上	30	12.4	18	16.4	8	9.3	3	11.1	0.172 <sup>b)</sup>

a)カイ二乗検定, b)Fisherの正確検定

表 2 援助要請スタイル、自己肯定感、自己成長主導性の援助要請自立群、過剰群、回避群における差の検定

N=223

	自立群 (n=110)	過剰群 (n=86)	回避群 (n=27)	P値 <sup>a)</sup>	多重比較 <sup>b)</sup>	
	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)			
援助要請スタイル	自立型 22.08(2.73)	過剰型 17.94(3.91)	回避型 16.85(3.92)	0.00***	A > B***, A > C***	
	過剰型 13.83(4.23)	回避型 24.63(2.95)	自立型 9.63(5.30)	0.00***	B > A***, A > C***, B > C***	
	回避型 12.54(4.93)	自立型 8.33(4.03)	過剰型 22.96(2.93)	0.00***	C > A***, C > B***, A > B***	
自己肯定感	24.75(5.95)	25.41(5.37)	21.93(6.94)	0.033	B > C*	
自己成長主導性	積極的な行動	4.07(0.87)	4.30(0.92)	3.86(0.99)	0.058	
	計画性	3.71(0.95)	3.81(1.00)	3.79(1.01)	0.637	
	変化への準備	3.46(0.86)	3.72(0.89)	3.56(1.19)	0.139	
	資源の活用	3.74(0.88)	4.31(0.81)	3.26(0.97)	0.00***	B > A***, B > C***
	合計	3.75(0.74)	4.03(0.72)	3.62(0.90)	0.037	B > A*

a)Kruskal-Wallis検定 b)Steel-Dwass検定

\*: P < 0.05, \*\*: P < 0.01, \*\*\*: P < 0.001

IV. 考察

本研究では、看護学生における援助要請の特徴を自己肯定感と自己成長主導性と関連付けて明らかにすることを目的に、近畿地方の看護系大学

3 校において調査を行い、主に用いる援助要請スタイルに基づき分類された自立群、過剰群、回避群の特徴を明らかにすることができた。以下、各群の特徴に応じた教育支援について考察する。

本研究の自立群は、110人(49.3%)と3群の中で最も人数が多かった。これは、一般大学生を対象とした先行研究でも、自立群の人数が最も多くなるという結果<sup>11)20)</sup>を支持するものであった。

本研究の自立群の援助要請自立型の平均値(*SD*)は22.08(2.73)であり、先行研究<sup>6)11)20)</sup>と比べて高く、看護学生は援助要請自立型をより多く用い、自身で問題解決を試みる傾向があることが示された。これは、問題解決思考に基づき看護過程を展開する看護基礎教育の影響を受けていると考えられた。また、援助要請過剰型の平均値(*SD*)は13.83(4.23)と回避群より有意に高く( $P<.001$ )、援助要請回避型の平均値は12.54(4.93)と過剰型より有意に高く( $P<.001$ )、過剰型や回避型も用いて援助要請を行っていることが明らかにされた。看護学生は、グループワークや演習等学生同士で助け合って学ぶことや、教員から直接指導を受けることが多く<sup>1)</sup>、援助要請過剰型を用いる機会が与えられていることが影響していると考えられた。一方で、実習においては、看護学生が人に頼らないことで周囲に影響を及ぼす問題に直面する場面も多いことが指摘されており<sup>9)</sup>、援助要請回避型を用いる機会もあることが示された。臨床現場においては、緊急時には応援を要請するという基本的な姿勢を身につけ、問題発生を予防できる援助要請の教育的支援が求められることが示唆された。

本研究の過剰群は、援助要請自立型の平均値(*SD*)が17.94(3.91)と中央値を超えていた。援助要請回避型が他の2群より有意に低く( $P<.001$ )、他者からの援助を多く利用しながら、自身で問題解決を試みる傾向があることが示された。また、自己成長主導性の下位尺度である資源の活用<sup>1)</sup>の平均値(*SD*)が4.31(0.81)と他の2群よりも有意に高く( $P<.001$ )、先行研究<sup>21)</sup>よりも高い値であった。自己肯定感も回避群よりも有意に高かった( $P=0.033$ )。これらより、資源の活用として援助要請を行うことで自己成長につながり、自

己肯定感が高くなる可能性が示唆された。これまでの研究<sup>20)</sup>では、過剰群は悩みや抑うつ<sup>1)</sup>の得点の高いことが指摘されている。本研究では抑うつ等との関連は検討していないが、異なる特徴を持つことが考えられた。関係機関、関係職種を重要な資源として活用し、連携、協働する援助を要請する教育を推進することが、学生の成長や自己肯定感の向上につながる可能性が示唆された。

本研究の回避群は、援助要請自立型の平均値(*SD*)が16.85(3.92)と中央値を超えていた。援助要請過剰型が他の2群より有意に低く( $P<.001$ )、他者からの援助を利用せずに、自身で問題解決を試みる傾向があることが示された。また、自己肯定感の平均値(*SD*)が21.93(6.94)であり、先行研究<sup>16)17)</sup>の平均値と比較しても低い点数であった。自己肯定感の低い人は、援助要請を回避する傾向にある<sup>22)</sup>との指摘や、教員や実習指導者の援助が、看護学生の自己肯定感の向上に影響した可能性が示唆されている<sup>23)</sup>。本研究は横断研究のため、各要因の因果関係は明らかにはできないが、学生自身が自己の能力や価値を肯定的に捉えられるような配慮<sup>23)</sup>、援助要請しやすい環境づくりの両面から支援することが必要と考えられる。回避群の人数は27人(12.1%)であるが、対人能力が低下している近年の影響を強く受けている群ともいえるため、注意深く対応していく必要がある。

## V. 結語

本研究では、既存の3つの援助要請スタイルの分類を基準とする特徴の違いについて検討し、援助要請自立型を基軸とし、資源活用としての援助要請が、自己成長や自己肯定感の向上につながる看護学生の特徴が示された。

しかし、近畿地方に限られた大学を対象にした結果であり、本研究では除外された短期大学や専門学校、男子学生の特徴との比較や、地域性を考慮したサンプリング等により、より詳細に看護学

生の援助要請の特徴を明らかにする必要がある。

また、援助要請に影響する要因を抽出する研究を積み重ね、影響要因との関連から、援助要請の潜在構造をより詳細に明らかにする分析方法も検討していく必要がある。

## VI. 結論

本研究では、看護学生における援助要請の特徴を自己肯定感と自己成長主導性と関連付けて明らかにすることを目的に、近畿地方の看護系大学3校において調査を行い、主に用いる援助要請スタイルに基づき自立群、過剰群、回避群の3群に分類し分析を行った。

本研究では、看護学生における援助要請スタイルの特徴を明らかにすることを目的とした。

看護学生は、援助要請自立型をより多く用い、自身で問題解決を試みる傾向があることが示された。これは、問題解決思考に基づき看護過程を展開する看護基礎教育の影響を受けていると考えられた。

自立群は、援助要請自立型の平均値が先行研究よりも高く、過剰型および回避型の援助要請も行っており、問題解決思考の看護教育、学生同士の協力や教員の指導を受けやすい演習、援助を要請しにくい実習環境等の看護学生の特徴が影響している可能性が考えられた。

過剰群は、援助要請自立型が中央値を超え、援助要請回避型が有意に低く、先行研究とは異なり、資源の活用として援助要請を行うことで自己成長につながり、自己肯定感が高くなる可能性が示唆された。

回避群は、援助要請自立型が中央値を超え、援助要請過剰型が有意に低く、自己肯定感は先行研究よりも低い特徴があり、自身を肯定的に捉えられるような配慮と援助要請しやすい環境づくりの両面からの支援の必要性が示された。

これらの看護学生の援助要請の特徴を踏まえ、学生の援助要請スタイルに応じた学習環境の整備や教育方法を検討することにより、学生が適切

に援助要請を行い、主体的に自己成長の行動を起こし、自己肯定感を向上させることに貢献できることが示された。

## 利益相反

本研究に開示すべき COI は存在しない。

## 文献

- 1) 近藤浩子・柿畑雅之・中村美香・近藤由香 (2023): 臨地実習における看護学生の援助要請行動に関する研究, 北関東医学, 73(1), 61-68
- 2) 小山慎治・池田裕 (2011): 「遠慮・察しコミュニケーション尺度」の作成 - 予備調査による尺度の改訂 -, 異文化コミュニケーション研究, 23, 21-46
- 3) 小熊信 (2023): コロナ禍における学生の生活と人間関係に関する研究, 中央大学文学部紀要社会学・社会情報学, 33, 43-62
- 4) 大久保暢子・佐竹澄子・大橋久美子 他 (2011): 看護学導入時期の学生が感じる困難性の検討, 聖路加看護学会誌, 15(1), 9-16
- 5) Srebnik, Debra, Ana Mari Cauce, & Nazli Baydar. (1996): Help-seeking pathways for children and adolescents, *Journal of Emotional and Behavioral Disorders*, 4(4), 210-220.
- 6) 永井智 (2013): 援助要請スタイル尺度の作成, 教育心理学研究, 61(1), 44-55
- 7) 雨宮千沙都・松田英子 (2015): 大学生の家族および友人への援助要請行動に被援助志向性, ソーシャルサポート, その他の心理的変数が及ぼす影響, 江戸川大学紀要, 25, 159-165
- 8) 永井智・小池春妙 (2013): 心理的援助の専門家への援助要請における諸変数間の関連の検討, 立正大学心理学研究年報, 4, 45-52
- 9) 石田直江・高橋方子・富樫千秋 (2024): 看護学生の援助要請の実態とその関連要因, 千葉科学大学, 17, 93-101
- 10) 永井智 (2020): 臨床心理学領域の援助要請研究における現状と課題 - 援助要請研究における3つの問いを中心に -, 心理学評論, 63(4), 477-496

- 11) 田島真沙美 (2020) : 女子体育大学生の援助要請スタイルに関する研究 : 援助要請スキル・被援助志向性・自尊感情の観点から, 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 55, 1-11
- 12) 内田知宏・上埜高志 (2010) : Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討—Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて—, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58(2), 257-266
- 13) 内閣府 (2014) : 平成 26 年版子供・若者白書 (概要版) 特集今を生きる若者の意識—国際比較から見えてくるもの—, 28-31. <https://www.aiina.jp/uploaded/attachment/2382.pdf> (検索日 : 2025 年 11 月 4 日)
- 14) Back, J.S. (2011) : Cognitive behavior therapy: Basics and beyond (2<sup>nd</sup> ed), The Guilford press, New York
- 15) 徳吉陽河・岩崎洋一 (2014) : 自己成長主導性尺度 II (PGIS-II) 日本語版の開発と心理的測定, 心理学研究, 85(2), 178-187
- 16) 合田友美・黒田裕子・小藪智子・新見明子 (2011) : 看護学生の自尊感情と職業的アイデンティティとの関連から考える教育的支援, 川崎医療短期大学紀要, 31, 75-81
- 17) 水野治久・石隈利紀 (1999) : 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向 3, 教育心理学研究, 47(4), 530-539
- 18) Chizu Mimura & Peter Griffiths. (2007) : A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment, Journal of Psychosomatic Research, 62, 589-594
- 19) Robitschek, C., Ashton, M. W., Sperring, C. C., Geiger, N., Byers, D., Schotts, G. C., & Thoen, M. A.. (2012) : Development and psychometric evaluation of the Personal Growth Initiative Scale— II, Journal of Counseling Psychology, 59, 274-287
- 20) 永井智 (2019) : 援助要請スタイル間の差異に関する探索的検討, 教育心理学研究, 67(4), 278-288
- 21) 徳吉陽河・岩崎洋一 (2016) : 認知行動コーチングの介入プログラム開発と効果検証 : REBT を応用したコーチング心理学による大学生に対する自己成長の支援, 応用心理学研究, 42(2), 140-148
- 22) 石黒良和・榎本玲子・山上精次・藤岡新治 (2016) : 援助要請と生活適応感の関連性 ~ 自尊感情と他者軽視の観点から~, 専修人間科学論集心理学篇, 6(1), 31-40
- 23) 伊藤ももこ・新井清美・竹内久美子・口元志帆子・古谷剛・石光英美子・林美奈子 (2010) : 臨地実習が看護学生の心理状況におよぼす影響—臨地実習前後の自己効力感と自尊感情の変化と学生の特性との関連—, 目白大学健康科学研究, 3, 67-73